

【研究ノート】 イタリアで活動した外国人美術家たち—1550～1650年

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2022-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 深谷, 訓子 メールアドレス: 所属:
URL	https://kcua.repo.nii.ac.jp/records/401

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



【研究ノート】 イタリアで活動した外国人美術家たち—1550～1650年

State of Research: Foreign Artists in Italy from 1550 to 1650

Michiko Fukaya 深谷 訓子

はじめに 問題提起と関心の所在

盛期ルネサンス以降、古代彫刻やミケランジェロ、ラファエロらの作品を見ることができるイタリアは、ヨーロッパの芸術家たちにとって、修養のために、あるいは更なる活躍の場を求めて訪れる目的地となった。またこうした古典的な作品群だけでなく、17世紀初頭には、カラヴァッジョやカラッチらが切り拓いた新たなバロック美術の作品も熱心な学習の対象となる。イタリアを訪れたこうした外国人美術家たちの帰国が、バロック様式の全ヨーロッパ的な伝播に繋がったと言っても過言ではない。とくにネーデルラント（現在のオランダ、ベルギーにほぼ相当する地域）からは、多くの芸術家がイタリア、とりわけローマを訪れ、ネーデルラントとイタリアの間の美術交流は、長らく、西洋美術史における重要な研究課題という位置づけを占めてきた。そのことは、数多くの論文に加えて、『ローマのネーデルラント人たち』に代表されるような学術的展覧会の開催や、『ネーデルラント美術史年報』の特集テーマ「芸術と移住：1400 - 1750年、移動したネーデルラント出身の芸術家」にも表れている通りである¹。

だがその一方で、この分野の研究史には、その重点の偏りも見受けられる。まず、イタリア内の地理的な重点は圧倒的にローマにおかれてきた。確かにローマは、教皇庁のあるバチカンを擁する最重要の都市であり、ラファエロやミケランジェロの作品は言うに及ばず、古代彫刻のコレクションやバロック萌芽期の作品を最もまとまった形で見る事ができたのもこの地にほかならない。そのため、ローマが優先的に研究対象となるのは当然のことではある。だが、そのほかの地域における芸術家の活動にも当然ながら無視できないものがあること、あるいはローマ訪問の前後に作家たちが立ち寄った土地と

ローマでの活動の関係性などを考えると、他都市における外国人美術家の活動についても更なる関心が注がれるべきであろう。また、例えば「オランダ美術」という観点から美術の南北交流の解明に取り組む研究者は、もっぱらイタリアを訪れたオランダ人作家たちの活動に注目し、他国出身の芸術家の動向については、直接的な関連の範囲内でしか触れない傾向がある（そしてそれがゆえに見落とされている関連が実は存在する可能性もある）。こうした「国別美術史」の傾向は、先述の先行研究のタイトルなどにも如実に表れている。

しかしながら、美術家たち同士の交流や影響関係、あるいはパトロンやコレクターと作家のやり取りは、しばしば出身地や国籍を越えて展開していた（もちろん同時に、同郷人であるという理由から便宜を図ることもあるが）。こうした実情に鑑みると、「イタリアで活動した外国人美術家たち」に関して包括的に考えようとするとき、現在の研究状況には、①ローマ重視、②同一出身地の作家への注目という2つの偏向があるように思われる。

そこで、本研究ノートでは基礎的作業として、1550年から1650年の間にイタリアを訪れた記録がある、あるいは作品等から訪問の可能性がかなり高いと考えられる作家たちを可能な限り網羅的に抜き出し、その滞在期間と滞在地を整理することを試みた。この作業に使用したのは、グローヴ・アート・オンライン（Grove Art Online）の提供している『グローヴ美術事典（Grove Art Dictionary）』（以下GADと略記）の伝記的記事である。1550年から1650年の間に存命期間の一部が重なる作家（もしくは芸術家家系）の伝記的記事は2,727件を数える（ただしこれには今回対象としないイタリア人や、アジアなど全く他地域の作家も含む）が、そこから、この期間中にイタリアを訪れた（とされる）作家を抜き出した。

その結果、当該の期間にイタリアを訪れた作家として

抜き出せたのは288名であった。ただし言うまでもなく、これは事典の「見出し項目」として採用される意義や情報量を有する作家に限られており、実際にイタリアを訪れた外国人芸術家の数はこの比ではない。また、この方法には後述するような限界もあり、あくまでも研究の足がかりを提供するに過ぎないことは強調しておくべきであろう。しかし、こうした無作為な方法でイタリア滞在経験のある外国人美術家をリストアップし、その滞在期間、滞在地、出身地等を表にまとめることにより、かなり可視化されたかたちで情報を整理することもできたように思われる【表1】。以下では、その成果の一部としてジェノヴァをモデルケースに取り上げ、同地における外国人作家の活動について考えてみたい。

1. ジェノヴァ —— 16世紀後半の不人気と事典では拾えなかった作家たち

ジェノヴァには、どの程度、どのような外国人作家たちが滞在し、活動していたのだろうか。今回の調査では、滞在期間が1550年から1650年の間に位置づけられる作家に絞ったが、そこからは、イタリア内の目的地選択に関して、時代による一定の傾向を見ることができた。例えば、16世紀に好まれた滞在地は、ローマに続いてヴェネツィアとフィレンツェであり、特にイタリアへの経路のゆえもあってか、ドイツ系の作家がヴェネツィアに滞在する例が目立つ。フィレンツェに関しては、ジャンボローニャやヨハネス・ストラダヌスなど、ゆうに30年以上にわたる長期滞在の作家がいたことが目立つが、あるいはこれは、短期滞在の作家が記録に残りに

くいシステムだったという史料上の問題とも関連しているのかもしれない。

ジェノヴァはどうかというと、16世紀後半には目立った滞在記録がほぼないといえる（ただし今回対象にしなかった16世紀前半については、むしろネーデルラントの作家の訪問があったことが知られている）。数少ない記録としては、アントニス・ファン・ヴェインハールデ（c. 1525-1571）というアントウェルペン出身の作家が、1552-53年に同地に立ち寄ったようで、ジェノヴァを表したエッチングが残されている。²しかし、地誌的な作品を専門にしたこの作家は、ジェノヴァに限らずイギリス、フランス、スペインなども訪れていることから、この港町は彼にとって何か特別な意図があって選んだ滞在地というよりも、旅の経由地であり、モチーフのひとつでもあったのだらうと推測される。こうした傾向から、16世紀後半のジェノヴァは、他国の作家たちを惹きつけるような芸術上の拠点ではなかったことが窺える。

しかし17世紀になると、一転して一定数の作家たちがこの都市を訪れるようになる【表2】。表2は、前述のようにGADの伝記の記事から拾い上げた、作家たちのジェノヴァ滞在歴である（先に挙げたファン・ヴェインハールデは除く）。しかしここでまず、この方法の問題点と限界についても述べておかなければならない。それは、作家の生涯や活動を比較的小コンパクトな事典の記事としてまとめるにあたって、ある都市への一時的な滞在歴は当然のことながら記述から省かれることがあるということだ。書き手の関心の所在によっても、記事に盛り込まれる情報は大きく左右される。

例えば、この一覧を目にしてまず気づかれるのが、ルー

表1 作業イメージ

ファイル	ホーム	挿入	ページレイアウト	数式	データ	校閲	表示	ヘルプ	Acrobat	コメント																			
P148																													
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	AA		
1									Rome	Venice	Genoa	Naples	Florence	Other cities or													Biblio.	Notes	
2																													
3			1550-	1555-	1560-	1565-	1570-	1575-	1580-	1585-	1590-	1595-	1600-	1605-	1610-	1615-	1620-	1625-	1630-	1635-	1640-	1645-	1650						
134	Juvenet, Paul I (b Nuremberg, bapt Dec 23, 1576; d Pozsony, Hungary [now Bratislava, Slovakia], 1643)														Rome, ca. 1610-ca. 1613													Among his earliest	
135	Kessel, Hieronymus [brother of van (bapt Antwerp, Oct 6, 1578; d Antwerp, 1636 or after)]														Rome, ca. 1610-13														
136	Kilian, Wolfgang (b Augsburg, 1581; d Augsburg, 1667)														ca. 1604-1611, in Mantua, Milan, Rome and Venice														
137	Kilian, Lucas (b Augsburg, 1579; d Augsburg, 1637)														1601-1604														
138	Kilian, Philipp (b Augsburg, 1628; d Augsburg, 1692)																												
139	König, Johann (Hans) (b Nuremberg, bapt Oct 21, 1586; d Nuremberg, March 4, 1642)														Rome, 1610-14														
140	Krüger (Crispian; Krüger), Dietrich [Theodor] (b Hamburg, 1537; d Rome, Jan 23, 1624)														Bologna, Florence, and from 1618-1624, Rome														
141	Laer, Pieter (Boddingh) van (b Bamboccio) (bapt Haarlem, Dec 14, 1599; d 1642)																												
142	Lafrey, Antoine (L'afrey, Antoine) (b Orgelet, Jura, 1512; d Rome, July 20, 1577)				Rome, 1544-1577																								
143	Lanchares, Antonio (b Madrid, c. 1590; d Madrid, 1628)																												
144	Langlais, François (Chartres, dit: Chartres) (b Chartres, bapt May 12, 1588; d Paris, Jan 13, 1647)																												
145	Lastman, Pieter (Pietersz.) (b Amsterdam 1568; d Amsterdam																												

ベンスによるジェノヴァ訪問が拾われていないことであろう。ルーベンスはジェノヴァのイエズス会教会のために主祭壇画《キリストの割礼》(1606年除幕)【図1】を制作しており、1605年から1606年にかけて、おそらくはマントヴァに本拠地を置きつつ、ジェノヴァを訪問したことが知られている。³そしてその滞在時に、同地の貴族の肖像画なども手がけている【図2】。また、1607年の夏から秋にかけても、この都市に滞在したとされており、こうした滞在の成果は、ルーベンス自身が執筆した『ジェノヴァの宮殿 (Palazzi di Genova)』(1622年)にもまとめられている。元々、アントウェルペンとジェノヴァの間には通商関係があり、ルーベンスがこうした書籍をまとめた背景には、建築史的な関心と同時に、ジェノヴァという都市に対して興味を抱く裕福なアントウェルペン商人が需要層として想定できたという背景もあるように思われる。

他に事典の記事では漏れてしまった作家としては、いずれもアントウェルペン出身のフランス・スネイデルス(1579-1657)やヤン・ブリューゲル2世(1601-1678)、さらにヤン・ロース(1591-1638)などが挙げられる。スネイデルスについては、1608年から翌年にかけてジェノ

ヴァに滞在した可能性が指摘されている。⁴しかしGADでは、1608年の春にローマに向けて発ち、その冬に、友人のヤン・ブリューゲル1世によるポッロメオ枢機卿宛での推薦状を携えてミラノへ移動し、1609年4月にアントウェルペンへの帰途につき、同年7月4日までには帰国していたという情報がまとめられているものの、ジェノヴァ滞在に関する言及はない。⁵ジェノヴァとミラノは結びつきの強い土地であり、また後述するようにアントウェルペンへの旅のルートを考えてジェノヴァを経由した可能性は高いと思われるが、確かにジェノヴァで証拠が見出されない以上、推薦上の名宛人が判明しており、確実に滞在したことが分かっているミラノを優先した記述になることはやむを得ないだろう。

似た例としては、ヤン・ブリューゲル2世(1601-1678)のジェノヴァ滞在が挙げられる。しかしこの画家に関しては、スネイデルスよりも確実にジェノヴァ滞在が跡付けられている。彼は1622年の10月から12月の間にジェノヴァに到着した。スネイデルスと同様に、父親のヤン・ブリューゲル1世からポッロメオ枢機卿宛での推薦状を持たされてミラノに遣わされた彼は、なぜかミラノではなくジェノヴァのコルネリス・デ・ヴァール(この人

表2 ジェノヴァを訪れた外国人作家たち (GADからの抽出結果)

作家名	出身国	1610	1615	1620	1625	1630	1635	1640	1645	1650
Lucas de Wael (1591-1661)	南ネーデルラント	1613-1628								
Cornelis de Wael (1592-1667)	南ネーデルラント	1613-1656								
Gerrit van Honthorst (1592-1656)	オランダ	1614 /15								
Leonard Bramer (1596-1674)	オランダ		After 1616- 19							
François Langlois (1588-1647)	フランス			1621						
Simon Vouet (1590-1649)	フランス			1621						
Anthony van Dyck (1599-1641)	南ネーデルラント			1621-27 (他都市への旅行もあり)						
Georg Petel (1601/02-c.1634)	ドイツ			1622- 24						
Goffredo Wals (1590/95-1638/40)	ドイツ			?-1623-?						
Andries van Eertvelt (1590-1652)	南ネーデルラント				1627-30					
Jan Fyt (1611-1661)	南ネーデルラント						1635?-41?			
Livio [Lieven] Mehus (c. 1630-1691)	南ネーデルラント							1640s		
Pieter Boel (1622-1674)	南ネーデルラント								1647-49	



図1 ルーベンス《キリストの割礼》1604 - 05年頃、カンヴァスに油彩、400 × 225 cm、ジェノヴァ、ジェズ教会

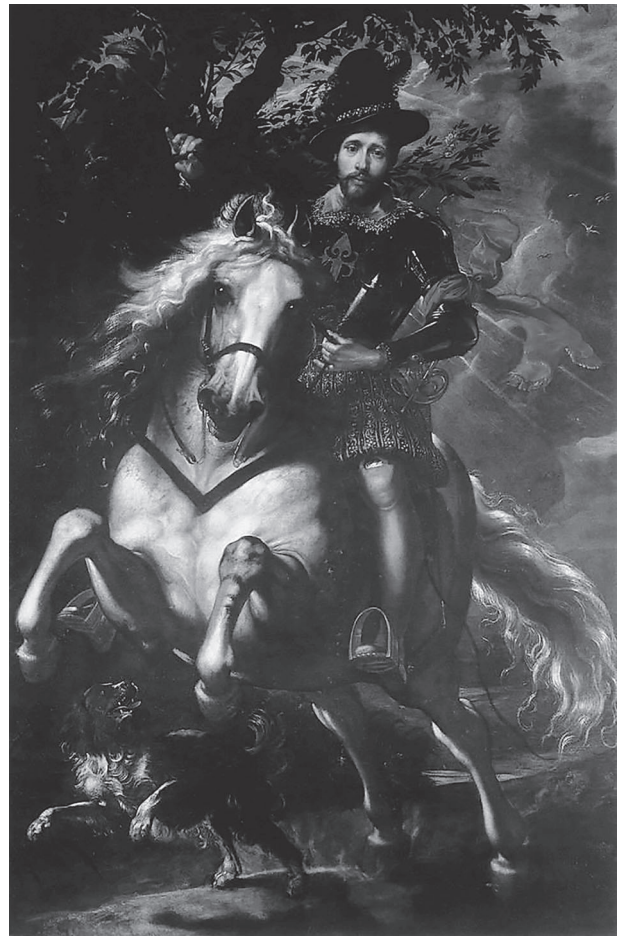


図2 ルーベンス《ジョヴァンニ・カルロ・ドーリアの肖像》1606年、カンヴァスに油彩、265 × 188cm、ジェノヴァ、バラッツォ・スピノーラ

物については後述)のもとに腰を落ち着ける。⁶また、1624年にはヴァン・ダイクと同時期に同じパレルモにいることから、おそらく2人はジェノヴァで知り合い、親交を持つことになったと思われる。しかし、ヤン・ブリューゲル2世に関しても、その比較的長い人生を事典の記事として簡潔にまとめるにあたって、ジェノヴァ滞在という事項は省略されている。

一方、1610年からスネイデルスの徒弟であったヤン・ロースは、ローマに赴く前にジェノヴァに滞在し(1614年)、1616年に帰国するつもりで再び訪れたジェノヴァに腰を落ち着けて、終生この都市で暮らした画家である。その作風は、フランス・スネイデルスの動物画や狩猟の獲物を伴った静物画を彷彿とさせるもので、この分野でイタリアの画家たちに影響を与えたことも指摘されている【図3】。しかし当該の事典にはそもそも独立した項目として採録されておらず、今回の手法では漏れてしまうことになった。こうした取りこぼしを見るに、今後の調査で

は、今回の結果を出発点として用いつつ、より絞り込んだ関心に基づいて、その都市の市誌や画家のモノグラフなどを組み合わせながら、情報の補強を試みていく必要がある。しかしながら、例えば仮に南ネーデルラントという出身地に着目していたら見落としかもしれないフランスやドイツの作家の存在が拾い上げられることがこの方法の利点であろう。

2. ジェノヴァを訪れた外国人作家たち——年代順概観

本題に戻り、ジェノヴァに滞在した外国人作家たちについて見ていこう。17世紀最初期のルーベンスの訪問、可能性が指摘されるスネイデルスの滞在に続けて注目すべきは、先にもヤン・ブリューゲル2世のところで名の挙がったデ・ヴァール兄弟のジェノヴァ移住である。アントウェルペン出身の画家兄弟であるリューカスとコル



図3 ヤン・ロース《二匹の猿と果物》1620年頃、カンヴァスに油彩、102.9 × 135.5 cm、ロンドン、ナショナル・ギャラリー

ネリス・デ・ヴァールは、1610年頃にイタリアに向けて発ち、1613年からジェノヴァに居を定めたと考えられている。兄のリュークスは1628年には帰国しているが、コルネリスの方は1656年にローマに移るまでジェノヴァに本拠地を置いた。また彼は、「フランドル人のたまり場 (Cenacolo Fiammingo)」などと呼ばれるサークルを築き、同地に赴いてきた同郷人たちの受け皿としての役割も果たした。言語の相違などの不安を抱えてイタリアを訪れる外国人作家にとって、こうした存在は大きかったに違いない。のみならずデ・ヴァールは画商、書籍商としての顔も持っており、ネーデルラントやスペインも射程に入れた取引を行っていた。⁷ 1610年代以降ジェノヴァを訪れる作家が増えていったことや、ロースのような画家が帰国せずに留まる決意をしたこと背景には、デ・ヴァールが整えた作品売買のための下地があったとも考えられる。

続いてジェノヴァを訪れたと考えられるのは、ユトレヒト出身のヘラルト (ヘリット)・ファン・ホントホルストである。この画家がいつ故郷を発ったのは明らかになっていないが、ローマにおけるこの画家の最初の痕跡は、カラヴァッジョの《磔刑に処せられる聖ペテロ》の模写素描 (署名と1616年の年記有り) だとされてきた。⁸ しかし近年のジャンニ・パーピらの研究により、この素描より前の1614年から15年頃に、ジェノヴァのサンタンナ教会に、《アビラのテレサに冠を授けるキリスト》【図4、5】を主題とする祭壇画を制作した可能性が指摘されるようになったのである。⁹ テレサの列福は1614年になされたが、おそらくそれを受けて、ジェノヴァの貴族マリア・パヴェーゼはこの教会に次のような申請を行っている。曰く、1614年9月時点でキエーゼ家の所有にあり、別の聖人たちに捧げられていた礼拝堂の所有権を獲得するとともに、この礼拝堂と祭壇を、テレサに捧げるもの



図4 ジェノヴァ、サンタンナ教会、聖女テレサ礼拝堂



図5 ヘラルト・ファン・ホントホルスト《アビラのテレサに冠を授けるキリスト》1615年頃、カンヴァスに油彩、300 x 180 cm、ジェノヴァ、サンタンナ教会

に変更したいというのである。実際に所有権変更の手続きが完了し、礼拝堂の完成を見るのは1616年のことであったが、18世紀の記録によれば、この間に、既に祭壇画を含めた礼拝堂の造営と装飾は進められていたという。こうしたことから、パーピヤジッフィらは、1614年の申請後まもなく、ファン・ホントホルストに祭壇画の注文がなされ、1614年末頃から1615年頃に作品が制作されたと考えている。¹⁰ そしてもちろん、このような注文に当たって、画家は同教会の聖職者たちと話し合うと同時に、採光や、祭壇そのものとも関連した大理石の額縁との兼ね合いなどを検討したに違いない。主題でもあるテレサは、1560年代にスペインで跣足カルメル会を設立した人物で、没後速やかに同会の重要な聖人となっていく。実はジェノヴァのサンタンナ教会は、イタリアで最初の跣足カルメル会の聖堂であり、その中心人物であるテレサを描いた本作は、同修道会の美術にとって重要な意義を持つものだと言える。

続いて、同じくオランダ出身のレオナルト・ブラーメルがジェノヴァを訪れる。この画家は南仏経由でイタリアに入ってきており、1616年2月にはエクサンプロヴァンスに滞在していたことが、一種の寄せ書き帳である「友情のアルバム (Album Amicorum)」から明らかになっている。かつ、遅くとも1619年にはローマに到着していることから、ジェノヴァ滞在はこの間、おそらく1617-18年頃に位置づけられるだろう。ちなみに1628年にはデルフトに戻っており、およそ10年間をローマで過ごしたことになる。ブラーメルの作品には年記があるものが極めて少なく、作風の展開を確実に跡付けることは困難であり、またどの程度の数の作品をイタリアで制作したかも不明である。しかし、ハスパール・ローメル (?-1674) というネーデルラント出身でナポリ在住のコレクターは、1634年の時点で、ブラーメルの作品を40点ほども所有していたことが知られている。¹¹ そのため、ブラーメル研究においては、ローメルとの接点を推測し、ブラーメルのナポリ滞在の可能性までもが示唆されてきた。¹² だがここで注目しておきたいのは、ハスパール・ローメルの代理人 (エージェント) として作品の入手に携わった人物のひとりが、先述のコルネリス・デ・ヴァールだったということだ。¹³ ブラーメルがナポリを訪れてローメルに会っていなかったとしても、ジェノヴァでブラーメルと知り合ったデ・ヴァールが彼の作品を推薦していれば、十分に両者は繋がるのだ。デ・ヴァールは1627年にはローマを訪れ、ブラーメルもその活動に積極的に関与していた「画家団 (スヒルデルスベント)」の記録にも登場している。明確に記録に残っているのはこの年のみだが、画商的な役割も果たしていたデ・ヴァールは、おそらく定期的にローマにも足を運んでいただろう。ブラー

メルとデ・ヴァールの間に、前者のジェノヴァ滞在時を越えた交友があったと考えることは十分に可能なのである。

次にジェノヴァを訪れたとされているのが、フランス、シャルトル出身のフランソワ・ラングロワである。プレオーによるGADの記事では、ジェノヴァ訪問は1621年とされている。¹⁴ しかし、版画家であり、画商としても働いていたこの作家は活発に旅行をしていたため、これ以降に同都市を再訪したこともあり得たのではないかと思われる。いずれにしても、イタリアとフランスの往来に当たってジェノヴァは交通の要衝であり、同地を訪問した作家たちのなかには、当初は通過地点としてこの都市に足を踏み入れたものも多くいたと思われる。

同じく1621年には、シモン・ヴェーエもジェノヴァを訪れている (1620-22年とされることもある)。ヴェーエは、1621年にマルカントニオとジョヴァンニ・カルロ・ドーリアの招きを受けてドーリア家に滞在し、《マルカントニオ・ドーリアの肖像》【図6】を描いたほか、彼らのために《ダヴィデとゴリアテ》【図7】や《ユディットとホロフェルネス》などの作品を制作している。ルーベンス、ファン・ホントホルスト、ヴェーエらは、いずれもそれぞれのジェノヴァ滞在以前に、当時ローマを席卷していたカラヴァッジョ様式をはじめとする最新のローマの美術動向に触れていた。彼らがジェノヴァにもたらした作品は、こ



図6 シモン・ヴェーエ《マルカントニオ・ドーリアの肖像》1621年、カンヴァスに油彩、129×95cm、パリ、ルーヴル美術館

の都市にバロック美術が伝播する契機ともなったのである。

しかし、最も印象的にジェノヴァと結び付けられている外国人画家といえば、アンソニー・ヴァン・ダイクではないだろうか。他都市にも足を運んだものの、彼は1621年から27年と比較的長期にわたってジェノヴァを拠点とし、同地の貴族たちの肖像画を多数制作している【図8】。また、デ・ヴァール兄弟やフランソワ・ラングロワとも親交を結び、彼らの肖像画を残している点も興味深い【図9、10】。ラングロワの肖像は、両者が既にジェノヴァを離れた後の年代のものと考えられており、おそらくネーデルラントやイギリスなど、他所で旧交を温める機会があったのだろう（あるいはジェノヴァに居たという共通項が糸口となり、他国で初めて親交を結んだものか）。ラングロワもデ・ヴァールと同様に作品取引のエージェントとしての顔も持っていたことを考えると、ヴァン・ダイクにとってこうした交流はビジネス上の意義も持ちうるものだったのではないだろうか。とはいえ、いかにも紳士然としたデ・ヴァール兄弟の肖像に比べると、ラングロワのそれは趣味の音楽に興じる穏やかで寛いだ姿を描き出したもので、両者の率直な友情を想定したくなるような作品だ。

続いて、ほぼ同じ頃にドイツ人作家が2人やってくる。ゲオルク・ペーテル（1622-24年にジェノヴァ滞在）と、



図8 アンソニー・ヴァン・ダイク《ジェノヴァの貴族の肖像》1624年、カンヴァスに油彩、131×101cm、リヒテンシュタイン公コレクション

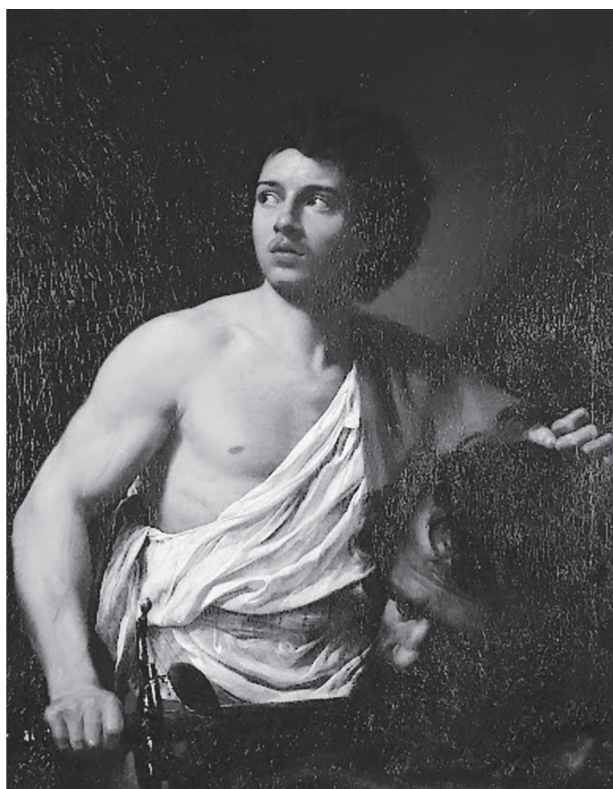


図7 ヴーエ《ダヴィデとゴリアテ》1621年頃、カンヴァスに油彩、123×95.5cm、ジェノヴァ、ムゼイ・ディ・ストラダ・ヌオーヴァ（パラッツォ・ビアンコ）

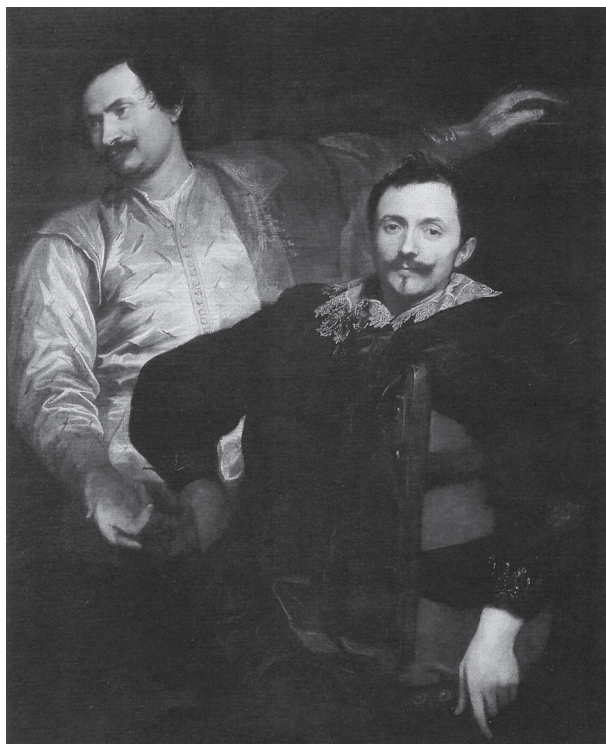


図9 ヴァン・ダイク《デ・ヴァール兄弟の肖像》1622-24年頃、カンヴァスに油彩、120×101cm、ローマ、カピトリニ美術館



図10 ヴァン・ダイク《フランソワ・ラングロワの肖像》1630年代初頭と推定、カンヴァスに油彩、97.8 × 80cm、ロンドン、ナショナル・ギャラリー

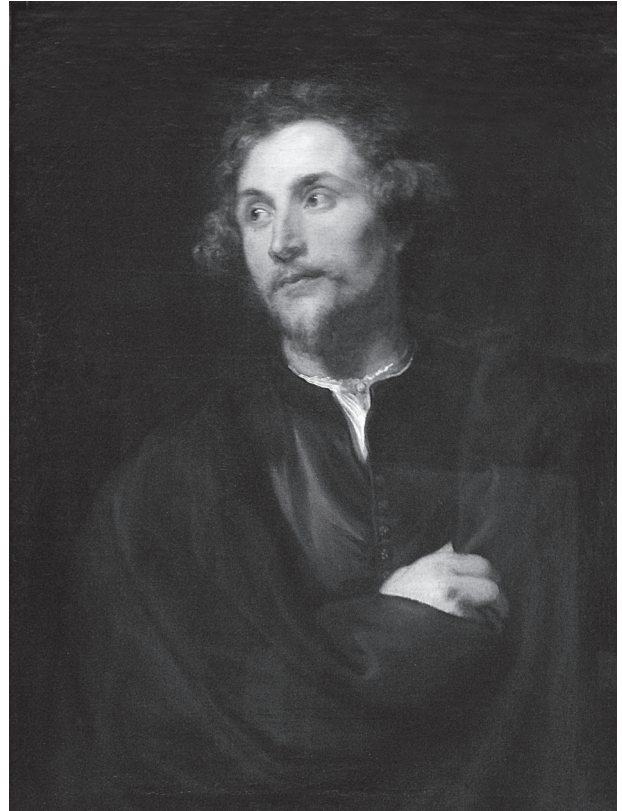


図11 ヴァン・ダイク《ゲオルク・ペーテルの肖像》1628年、53.5 x 57 cm、ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク (Photo: Jean-Pol Grandmont)

期間は不明ながら、イタリア人の弟子を連れて1623年に同地にいたことが知られているゴッフレード（ゴットフリート）・ヴァルスである。¹⁵

ゲオルク・ペーテルはバイエルン出身の彫刻家で、1620年に南ネーデルラントを訪れてルーベンスの知己を得、さらにパリを経てローマへと赴き、その旅の間にヴァン・ダイクとも知り合っている。ペーテルがその後数年間ジェノヴァに滞在し、同地の貴族たちからの注文を手がけた背景には、そうした顧客に対するヴァン・ダイクの口利きがあったのではないだろうか。彼らは、後年ネーデルラントで再会しており、1628年にはヴァン・ダイクがペーテルの肖像画を残している【図11】。ここには、たまたま一時期同都市に滞在したということを超えた親交の跡を見てとることができるだろう。

このペーテルの滞在期間と重なる時期に、同じくドイツ（ケルン）出身のゴッフレード・ヴァルスもジェノヴァに滞在していた。現在の知名度こそ高いとは言えないものの、17世紀当時にはよく知られた風景画家である。イタリア各地を移動して活動しており、若い頃にナポリに赴いたのち、1616-17年頃から1618年の末頃までローマのアグスティーノ・タッシのもとで活動したと考えられている。1623年にはジェノヴァに滞在しており、その際にはイタリア人画家アントニオ・トラヴィを徒弟とし

ていた。その後、彼はあらためてナポリに戻り、カラブリアでその生涯を終えている。興味深いのは、先にレオナルト・ブラーメルのところで見たとコレクターのローメルが、彼の作品も多数所持していたということだ。¹⁶ ヴァルスは実際にナポリを活動地としていたため、直接のコネクションも考えられるが、ここでもコルネリス・デ・ヴァールの仲介の可能性は無視できないだろう。また、レオナルト・ブラーメルとゴッフレード・ヴァルスの共通の知人は、デ・ヴァールに留まらない。風景画家として有名なクロード・ロランは、ブラーメルが1627年にローマで喧嘩沙汰の揉め事を起こした際にそれをとめようと試みて負傷した友人であり¹⁷、かつ、ヴァルスの名声に引かれて彼のもとで制作すべく2年ほどをナポリで過ごした人物でもあった。このように、イタリアの地で、南ネーデルラントのコレクターや画商、オランダ、フランス、ドイツの画家たちは、互いに交友関係を結び、協力しあいながら異国の地で活路を見出していたのである。

次に見るアンドリース・ファン・エールトフェルトは、1615年に結婚した妻カテリーネ・フリーヘルの逝去（1627年）の後にジェノヴァを訪れ、1630年頃にはアントウェルペンに戻っている。この間、彼はコルネリス・デ・ヴァールのもとで制作に勤しんだようだ。ヴァン・ダイクの帰



図12 ヴァン・ダイク《アンドリース・ファン・エールトフェルトの肖像》
1632年、176.5×229cm、シュレスハイム城（バイエルン州絵画
蒐集）

国年（1627年）、さらにファン・エールトフェルトの帰郷後の1632年にはヴァン・ダイクが彼の肖像画【図12】を制作していることを考えあわせると、この画家のジェノヴァ滞在は、ヴァン・ダイクの薦めによるものだったのではないと思われる。ヴァン・ダイクが制作した肖像画にも見てとれるように、ファン・エールトフェルトは船舶を描くことを得意とした海景画家であり、フランドルではこのジャンルの嚆矢と見なされている。こうした海景画、特に戦闘場面は、コルネリス・デ・ヴァールが手がけたジャンルのひとつでもあった【図13】。¹⁸ 今日、デ・ヴァールの作品はその真筆性の確認が難しく、また制作年代も推定に留まるものが多いため、彼とファン・エールトフェルトの影響関係については即断することができないが、ジェノヴァという長年海軍力・海運力を誇ってきた港町という土地柄と、こうした新ジャンルの確立との間にはおそらく何らかの関係性があったに違いない。

次にジェノヴァ滞在为示唆されているのは、ヤン・フェイトである。フランス・スネイデルスのもとでの修業を終えた後、1633年と34年にはパリ滞在为確認されており、そこからイタリアへも足を伸ばしたと考えられてきた。イタリア滞在为歴があることは、1650年に、ローマ滞在为経験があるもののみ入会が認められるアントウェルペンの「ロマニストのギルド」に参加している事実のほか、ローマのスヒルデルスベント（画家団）でのあだ名が知られることから裏付けられる。1641年9月にはアントウェルペンに戻っているため、彼のイタリア滞在为は1635年頃から1641年までということになり、ジェノヴァ滞在为はこの期間のどこかに想定される。¹⁹ 既に他の画家のところでも見たように、ジェノヴァはフランス経由でローマに向かう際の重要な経由地のひとつであったため、ヤン・フェイトがジェノヴァに足を踏み入れた可能



図13 コルネリス・デ・ヴァール《海戦図》1620年代後半と推定、カン
ヴァスに油彩、123×162.5cm、ジェノヴァ、ガラータ海洋博物館

性は高いものと思われる。さらに、前述のように、彼の師匠のスネイデルスにもジェノヴァ滞在为の可能性が示唆されるほか、フェイトと同様にスネイデルスのもとで学んだヤン・ロースが、1616年から1638年に亡くなるまで、ジェノヴァで活躍していた。フェイトのジェノヴァ滞在为の可能性は1635年から41年の間のどこかということで、彼が生前のロースに会えたかどうかは断定できないが、スネイデルスから、ヤン・ロースやデ・ヴァールの情報を聞き知っていたということは大いにありうるだろう。

次に見るリーフェン・メーフス（後にイタリア風に改名してリヴィオ・メーフス）は、ネーデルラントのアウトデナルデ出身で、およそ10歳で家族とともにミラノに移住するという経緯でイタリアに活動の場を持った人物である。彼のジェノヴァ滞在为については、具体的な事柄がほとんど知られていないが、1640年代後半かと想定される。ジェノヴァに限らず全体を通じてみると、メーフスのように幼い頃に家庭の事情で移住した芸術家も散見されるが、彼らのアイデンティティの持ち方や活動の場の切り拓き方については確実に知られることが少なく、今後の検討を要すると思われる。メーフスの場合、最初の修業はイタリアで活動していたフランドル出身の画家、カルロ・フィアミンゴのもとで行われたとされている。²⁰

続けて、アントウェルペン出身のピーテル・ブルもジェノヴァで活動した。²¹ 彼はコルネリス・デ・ヴァールのもとに滞在为し、彼のために作品を制作したと考えられている。²² 後に、デ・ヴァールの妹の娘（コルネリスにとって姪）のマリア・ブランカールトと結婚していることから、²³ ジェノヴァ滞在为時からデ・ヴァールと親交を結んだ可能性は高いだろう。また、ブルの師匠は前述のヤン・フェイトである（かつフランス・スネイデ

ルスにも学んだ可能性も示唆されている)ことから、ジェノヴァに十分な活躍の場、あるいは受け皿があることを知っていたフェイトらの情報から、ブルがジェノヴァを滞在地に定めたということもあったかもしれない。

3. ジェノヴァ選択の理由や特徴

前項では、期間の長短はあれど、ジェノヴァに滞在した記録が残る、あるいはその可能性が高い美術家たちの滞在を年代順に概観した。その結果、現段階で導き出された特徴は以下のようにまとめられる。

まず、ジェノヴァという都市の地理的・経済的位置づけが重要である。よく知られているように、この都市は長らくフランドルのブリュージュと通商関係を築いていた。時代が下り15世紀になると、フランドル内の外国人商人たちがアントウェルペンに集められたこともあり、ジェノヴァにとっての取引相手も必然的にアントウェルペン商人たちに移った。こうした背景から、アントウェルペンを訪れたことがあるジェノヴァ商人が増え、彼らのなかにはネーデルラント絵画を購入して持ち帰り、コレクションに加えるものもいた。こうしたジェノヴァとアントウェルペンの関係の深さは、ネーデルラント出身の画家たちにとって促進的な要素となったに違いない。一方で、前述の通り、16世紀後半には、ジェノヴァに滞在した外国人作家の記録は相対的にかなり減少する。これは、当時の戦乱の影響に加えて、この都市がローマ、ヴェネツィア、フィレンツェといった人気の目的地とは異なり、必ず見るべきイタリア美術の作品に富むところではなかったという状況が関係しているように思われる。

一方で、17世紀に入ると、交通の要衝にあり、特に南仏とイタリアを往来する際には通過地点となるジェノヴァの地の利が活かされるようになってくる。また、ルーベンス(イエズス会)やファン・ホントホルスト(跣足カルメル会)など、おそらくまずはローマでその教団や修道会と繋がりを得た外国人画家が、ジェノヴァの教会の祭壇画の仕事を手がけるようになってきた。またヴェーエのようにローマで活躍した画家が、フランスへの帰途にこの地にしばし引き止められ、ドーリア家のための作品制作を行うなどの例も生まれてくる。

しかし、こうした著名な歴史画家たちの活動にもましてジェノヴァで重要だったのは、おそらく本稿にも繰り返し登場したデ・ヴァール兄弟の築いた受け皿の存在であろう。彼らは自らの画業に加えて、故郷アントウェルペンとジェノヴァを結ぶ美術品や書籍の取引を請け負った。また、イタリア国内の著名なコレクターの代理人としても活動している。とりわけコルネリス・デ・ヴァー

ルのジェノヴァでの活動は1613年から56年までと40年以上に及び、その間、彼はヴァン・ダイクをはじめとする多くの画家たちに、いわばイタリアにおける「ホーム」を提供してきたのである。また、ヴァン・ダイク(そしてことによるとスネイデルス)も、こうした基盤のあるジェノヴァに知り合いの作家たちを送り込むのに一役買っていたように思われる。本稿でも挙げたように、ジェノヴァで活躍した外国人画家たちの多くには、ヴァン・ダイクの手になる肖像画が残されている。メーフスやブルの滞在時期にはヴァン・ダイク自身が既に没後であることを考えると、かなりの高確率で肖像画が残されており、デ・ヴァールを中心としたジェノヴァの外国人芸術家サークルの活況に、ヴァン・ダイクも少なからぬ貢献を果たしていたことが想像されるのである。

そうは言っても、ジェノヴァに滞在した外国人美術家の数は他の中心地に比べてそこまで多くはない。また、道中の短期間逗留や単発の仕事という範囲を超えて同地で活動した画家たちについて見ると、動物画、静物画、風景画など、コレクションの目玉というよりはむしろ周縁的な(しかし定番の)作品群となるタイプのジャンルを専門とするメンバーが目立つ。また、出身地別に見るとやはり南ネーデルラント(フランドル)の出身者が多く、このことはもともとフランドルとジェノヴァの間にあった通商関係、ならびに前述のデ・ヴァールの築いた地盤が大きく影響していたのであろう。

今回は、冒頭に述べたような問題意識から、イタリアを訪れた外国人作家たちの活動やその交流、移動の諸相を可能な限り包括的に把握する方法がないかどうか探る試みの一環として、美術事典の記事からの無差別的な情報収集と、ジェノヴァという一都市に絞ったその後の分析を行ってみた。未だ包括的な成果を得るには程遠いが、都市ごとの傾向や、出身別の滞在期間を比較するには有効な部分もある方法であったため、今後、これを出発点に情報の充実とより多角的な分析を進めたい。

註

* 本研究ノートは、京都市立芸術大学特別研究助成(2020-21年度)の成果の一部です。

1 Anne-Claire de Liedekerke and Hans Devisscher eds., *Fiamminghi a Roma: 1508-1608: artisti dei Paesi Bassi e del Principato di Liegi a Roma durante il Rinascimento*, [Bruxelles, Palais des beaux-arts, 24 February-21 May 1995, Roma, Palazzo delle esposizioni, 16 June-10 September 1995], Milano: Skira, 1995; Frits Scholten, Joanna Woodall and Dulcia Meijers eds., *Art and migration: Netherlandish artists on the move, 1400-1750 (Nederlands Kunsthistorisch Jaarboek)*, 2014.

2 Jane Shoaf Turner, "Wyngaerde, Anthonis [Anton] van den [Vigne, Antoine de la; Viñas, Antonio de las]", *Grove Art Online*,

- 2003 (<https://doi.org/10.1093/gao/9781884446054.article.T092497>)
- 3 ただし 1604 - 05 年など、やや早めの制作年代の推定も見られる。例えば以下。Nichele Nicolaci, "Giovanni Baglione e Pietro Paolo Rubens tra Roma e Mantova", in: Raffaella Morselli and Cecilia Paolini eds., *Rubens e la cultura italiana 1600-1608*, Rome, 2020, p.122.
 - 4 Piero Boccardo, et.al., *A Superb Baroque. Art in Genoa, 1600-1750*, Princeton and Oxford, 2020, p. 71.
 - 5 Hella Robels, "Snyders [Snijders], Frans." *Grove Art Online*, 2003 (<https://doi.org/10.1093/gao/9781884446054.article.T079417>)
 - 6 William M. Griswold, "Painting and Drawing in Genoa: An Overview", in: Carmen Bambach and Nadine M. Orenstein eds., *Genoa: Drawings and Prints, 1530-1800*, New York, Metropolitan Museum of Art, 1996, p. 9; Alison Stoesser, *Van Dyck's Hosts in Genoa: Lucas and Cornelis de Wael's Lives, Business Activities and Works*, Turnhout, 2018, p.41.
 - 7 デ・ヴァール兄弟の活動については以下を参照。Stoesser, *op.cit.* (n.6).
 - 8 J. R. Judson, R. E. O. Ekkart, *Gerrit van Honthorst 1592-1656*, Doornspijk 1999, p. 331; B. Ebert, L. M. Helmus, *Utrecht, Caravaggio and Europe*, Utrecht (Centraal Museum) Munich (Alte Pinakothek), 2018-2019, pp. 98-103.
 - 9 G. Papi, *Gherardo delle Notti: Gerrit Honthorst in Italia*, Soncino 1999, p. 16-17, 138-140; G. Papi ed., *Gherardo delle Notti: Quadri bizzarrissimi e vene allegre*, Firenze 2015, p. 156.
 - 10 E. Giffi, 'Due dipinti di Gerrit van Honthorst a Genova', in: *Bollettino d'arte*, 60 (1990), p. 95-98.
 - 11 Michiel Plomp et al., *Leonaert Bramer 1596-1674: Ingenious Painter and Draughtsman in Rome and Delft*, Zwolle, 1994, p. 53.
 - 12 Ibid.
 - 13 Renato Ruotolo, "Roomer, Gaspar." *Grove Art Online*. 2003 (<https://doi.org/10.1093/gao/9781884446054.article.T073812>)
 - 14 Maxime Pr aud, "Langlois, Fran ois" *Grove Art Online*. 2003 (<https://doi.org/10.1093/gao/9781884446054.article.T049174>)
 - 15 ちなみに、ヴァルスの生涯に関する記事 (<https://doi.org/10.1093/gao/9781884446054.article.T090561>) ではジェノヴァ滞在は 1630 年頃とされているが (この記事は無記名)、ニューカムによるアントニオ・トラヴィの記事において、その情報は 1623 年と修正されている。以下を参照。M. Newcome, "Travi, Antonio [il Sestri]", *Grove Art Online*. 2003 (<https://doi.org/10.1093/gao/9781884446054.article.T086057>)
 - 16 ここで述べたヴァルスの生涯に関する情報は、ジェノヴァ滞在時期に関する情報を除き、前注にも挙げた次の記事を参照。 <https://doi.org/10.1093/gao/9781884446054.article.T090561>
 - 17 Plomp, *op.cit.* (n.11), p. 16.
 - 18 ここでは、デ・ヴァールによる海景画のなかでは比較的早い制作年代が想定され、かつパブリック・コレクションに収蔵されている作品を例に挙げた。彼による海景画に関しては、以下を参照。Stoesser, *op.cit.* (n.6), pp. 530-535.
 - 19 Arnold Balis, "Fyt, Jan", *Grove Art Online*. 2003 (<https://doi.org/10.1093/gao/9781884446054.article.T030296>)
 - 20 Franco Moro, "Mehus, Livio [Lieven]", *Grove Art Online*. 2003 (<https://doi.org/10.1093/gao/9781884446054.article.T056543>)
 - 21 Arnout Balis, "Boel, Pieter", *Grove Art Online*. 2003 (<https://doi.org/10.1093/gao/9781884446054.article.T009553>)
 - 22 *Grove Art Dictionary* の記事では滞在時期の明確な特定はされていないが、RKD のデータベースによればジェノヴァ滞在は 1647-49 年。(オランダ国立美術史研究所 RKD、ピーテル・ブール (Peeter Boel) <https://rkd.nl/explore/artists/9645>)
 - 23 Stoesser, *op.cit.* (n.6), p.401.

